

# 栄養士養成課程の短期大学生による幼稚園児の食農教育

## － 学生の食農教育実践力の調査 －

### Dietary and Agricultural Education for the Kindergartener by the Junior College Student of a Dietitian Training Course

#### － Research on a Student's Practical Ability of Dietary and Agricultural Education －

田中恵子\*・藤岡美香\*\*・山本麻衣\*\*\*

Keiko TANAKA, Mika FUJIOKA, Mai YAMAMOTO

#### 要約

本学では栄養士としての実践的な能力を養う目的で、さまざまな学生の農業体験の実施に取り組んできた。しかし、断片的な活動のみであったため、本年度4月より農作物の管理や収穫を学生と幼稚園児が共に行い、学生を中心とした園児に対する食育活動や調理を開始した。本研究では、この活動により学生の食農教育に対する実践力を評価することで、今後の学生に対する実践的な食農教育の指導方法を検討することを目的とした。学生の指導方法として一方向型の講義ではなく双方向型のアクティブラーニングを用いたPDCAサイクルに沿った演習を行った。また、Plan時は食農教育について事前学習を行った上でブレインストーミング型のグループワーク及び発表を行い、最終的に「食農教育」の実施方法や手順、園児の指導方法について全体でまとめて計画を行い実施した。次に学生の評価としては、学生の到達目標を2つ掲げ、評価のためのルーブリックを作成し、評価を行った。その結果、到達目標1については、10名の内8名の学生において実施後、ルーブリックレベル(以下、レベル)が3又は2まで到達することができていた。実施前と比較すると10名中5人はレベルが1または2上昇していた。到達目標2については、10名の内7名の学生において実施後にレベルが3または2に到達することができていた。実施前と比較すると10名中6名の学生において、レベルが1または2上昇していた。学生主体の食農教育の取り組みにより、設定していた到達目標にはほぼ全員(10人中8人)がレベル2～3に到達することができた。また、PDCAサイクルに沿って学生自身が考え、行動することで「食農教育」に対する知識が深められ、実践力もついたと考える。

#### キーワード:

食農教育、アクティブラーニング、ルーブリック

#### I. 緒言

近年、食育の現場では「育てること」と「食べることを繋いだ「食農教育」が盛んに実施されている。岐阜県の南東部に位置し、山や田畑などの自然豊かな土地に囲まれた瑞浪市に位置する本学においても栄養士としての実践的な能力を養う目的で、これまでに様々な農業体験及び食育教室の実施に取り組んできた。例えば、マコモタケを使用した産学官連携食育活動や、地域の野菜や特産品を使用した親子の料理教室「ウキウキ!食の探検隊!」や稲津スポーツ文化クラブの方を対象とした「レッツ!食王!」、「瑞浪小学校親子の料

理教室」などである。

しかし、これらの活動は断片的なものであり学生が主体となって実施することが少なかった。さらに、先行研究において学生による幼児に対する食育実践や食農教育の実施報告があるが<sup>1)2)3)</sup>学生の実践力を具体的に評価した研究は少ない状況である。

そこで、本年度4月より農作物の管理や収穫を学生と幼稚園児が共に行い、学生が主体となって園児に対する食育や調理を行う取り組みを開始した。この活動により、学生の食農教育に対する実践力がどのくらいついたのかをルーブリックを用

\*本学教授, \*\*本学助教, \*\*\*本学助手

いて評価を行い、今後の学生に対する実践的な食農教育の指導方法を検討することを目的とした。

## II. 方法

### 1. 調査対象者及び手続

平成 29 年 4 月に食育内容演習を受講している学生 10 名を対象とした。本調査の主旨と目的、個人情報保護に関する説明文を配布し、同意の得られた学生を対象とした。また、本調査の実施に先立ち、中京学院大学短期大学部研究倫理委員会からの承諾を得た。(第 29012 号)

### 2. 調査期間

平成 29 年 4 月～10 月

### 3. 調査方法

#### ①学生の指導方法

本取り組み全体のコーディネートについては教員が幼稚園側と連絡を取り計画を行ったが、食育や調理内容の計画・実施については学生が中心となって行い、学生が主体的に学べるように計画した。このような学生が主体となった体験型の学修を行うにあたり、以下の PDCA サイクルに沿った講義計画を立て、実施した。

#### Plan

食農教育について事前学習を行ったうえで、ブレインストーミング型のグループワークおよび発表を行った。(図 1) このグループワークにて最終的に「食農教育」の実施方法や手順、園児の指導方法について全体でまとめて計画を行った。教員 1 名と補助教員 1 名は、ファシリテーターとして各グループに声掛けや助言を行った。一方的な指導にならないように学生との「対話」を心掛けて意見を引き出すように留意した。



図 1. 「食農教育」というテーマでブレインストーミングをする学生の様子。(上) その内容をカテゴリー分けし、まとめたもの。発表時に使用した。(下)

#### Do

計画に沿って食農教育を実施した。実際に園児と共に行った栽培活動ではナス、ピーマン、ミニトマト、トウモロコシ、ラディッシュの栽培を行った。

農作物の収穫を園児と共に行い、その後収穫した野菜を用いて調理し、園児の給食時に提供した。さらに「命の繋がり」をテーマとした食育を実施した。(図 2) また、親子の食育教室を開催し、そこでも収穫した野菜を使用して園児及び保護者と共に調理を行った。



図 2. 幼稚園にて食育指導の様子

**Check・Act**

実施した食農教育について園児の反応や様子、学生による指導の様子等から本計画の振り返りを行った。問題点や今後の改善点についてグループワークを実施した。

**②学生の評価方法**

評価のタイミングは、PDCAサイクルにそった演習を実施する前（以下、実施前）と、演習を実施した後（以下、実施後）とした。各段階において、「食農教育についてその意義及び手順について説明しなさい」というテーマのレポート形式の試験を実施した。この試験の評価指標として、到達目標に基づきルーブリックを作成し、評価を行った（表1）。評価者は担当教員1名と補助教員2名で行った。

表1. 学生の到達目標及び評価に用いたルーブリック

レベル	到達目標1	到達目標2
1	『食農教育』の意義・目的を理解できている。	『食農教育』の方法・手段を理解できている。
2	『食農教育』の意義・目的について、1～2つ挙げることができる。	『食農教育』の方法・手順について、その概要を理解できている。
3	『食農教育』の意義・目的について、2つ以上挙げることができる。その根拠について理解できている。	『食農教育』の方法・手順について、具体的な方法・手順を理解しており、指導のポイントについても理解できている。

**Ⅲ. 結果**

到達目標1については、10名の内8名の学生において実施後に、ルーブリックレベル（以下、レベル）が3又は2まで到達することができていた。実施前と比較すると10名中5人はレベルが

1または2上昇していた。

到達目標2については、10名の内7名の学生において実施後にレベルが3または2に到達することができていた。実施前と比較すると10名中6名の学生において、レベルが1または2上昇していた。

表2. 実施前と実施後のルーブリックレベル変化

学生	到達目標1		到達目標2	
	実施前	実施後	実施前	実施後
A	2	2	1	2
B	-	3	-	3
C	-	1	-	1
D	2	2	1	2
E	2	3	1	2
F	1	3	1	2
G	2	1	1	1
H	1	2	1	2
I	1	2	1	1
J	2	3	1	3

※「-ハイフン」印の箇所は、Plan時に参加できなかった学生を表している。

**Ⅳ. 考察**

学生を主体とした食農教育の取り組みにより、設定していた到達目標にほぼ全員（10人中8人）がレベル2ないしは3に到達することができた。断片的な活動のみではなく、PDCAサイクルに沿って学生自身が考え、行動することで「食農教育」に対する知識が深められ、実践力もついたと考えられる。

最終評価において、「この活動を通して『食農教育』の意義と手順を説明しなさい」というテーマ設定を行い、レポート形式の試験を行った。1名の学生は、本活動の感想文となってしまっており、その理由で最終的な評価が、1段階下がったレベルとなってしまった。問題文の意図を十分に説明する必要があったと考えられる。

## V. 検討課題

1. 学生の主体性を引き出すために、声掛けのタイミングや課題解決に向けたまとめのやり方へ導いていく教員サイドのテクニックが必要となる。その辺りが今後の検討課題でもあり、さらに改善を目指して継続していきたい。
2. 演習型授業における学生の評価方法を今後は統計的手法も含めて検討する必要がある。また、学生自身に「実践力をつける」ことを目標に、実際の教育現場でどのくらい学校で得た技術が役立っているのかを評価していく必要もあると考える。
3. 食農教育の実施方法に関して園児と学生の栽培活動をもっと増やし、食育実施後の園児の変化については、学生にフィードバックすることも必要なので今後、検討していきたいと考えている。

### 【謝辞】

本調査の実施にご協力をいただきました、中京幼稚園教職員及び中京学院大学短期大学部健康栄養学科2年次の食育コースの皆様には深謝申し上げます。

### 引用文献

- 1) 藤井千亜紀：“学校栄養士を目指す学生による食農教育実践”，同志社政策科学院生論集，pp.65-68，2013
- 2) 清水池 義治：“農作業体験を含む食農教育が大学生の食意識に与える影－名寄市立大学保健福祉学部食農教育科目受講生を対象として－” 名寄市立大学 道北地域研究所 年報，第30号，pp.65-74，2012
- 3) 三浦さつき 他：“栄養士・保育士養成課程の短期大学生による保育園児の食育プログラム”，奈良佐保短期大学部紀要，第20号，pp.41-58，2012

### 参考文献

- 1) 大橋健治：“アクティブ・ラーニングの試み”，筑紫女学園大学・筑紫女学園大学短期大学部紀要，5，pp.217-227，2010